神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A farewell message to prof. Tagawa

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻本, 庸子, 辻本, 庸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1798

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

田川先生に送ることば

辻　本　庸　子

田川先生が 2013 年 3 月をもって、本学を退職されました。長年、同じ英米学科に在籍し、またアメリカ文学という専門分野を同じくする者として、先生の思い出を少し書かせていただきます。

田川先生が辞められて、大学における個性派の一人が去られたという感を持っています。一昔前、大学には、個性的な先生がとても多くおられました。大学の規則や行事などは今よりはゆるやかで、のどかで、個人の自由意志、つまりは勝手が許された、そういう時代でありました。今では考えられないような諸先生の、エピソードや武勇伝が、懐かしく思い出されます。田川先生はそのような武勇伝を残す方ではありませんが、目立たないながらも、誰よりも自分らしく教え、自分らしくあることを最後まで貫かれていたように思います。それは簡単なようでいて、なかなか容易に実行出来るものではありません。それを先生は実にひょうひょうとなされた。ご自分の意志を貫くその強靭さにおいて先生の右に出る方はおられなかったと思います。

先生は大学院を出られ、助手として出身大学の本学に戻ってこられました。その当時は、ヒッピー文化が華やかなりし頃で、先生はオートバイに乗って大学に来られていたそうです。アメリカ南部の代表的作家、ウィリアム・フォークナーがご専門でしたから、在外研究は南部のメリーランド州ボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大学に行かれました。帰国されてから、師事されたジョン・アーウィン教授がどのような方であったかと楽しそうにお話しくださったこともあります。フォークナー学会にも所属されていましたが、先生が書かれた『響きと怒り』の論文で、登場人物ベンジーが乗った馬車は右回りに回ったのか、左回りに回ったのかと考察されているものがありました。論文を読んだ時は、それがどうして命題となるのかがよくわかりませんでしたが、アメリカのフォークナー学会（フォークナーゆかりのミシシッピ大学で毎年開かれる）に参加して、フォークナーが住んでいたオックスフォードの町の中心にあるロータリーを見たとき、先生もここに立たれて、あの論文の構想を練られたのだろうと妙に納得することができたものです。フォークナー学会の会員の結束力は素晴らしく、研究者たちのフォークナーに寄せる熱い想いがひしひしと感じられる学会でした。しかし先生は、作品の素顔に触れる手がかりは、そ

のような仰々しい学会からではなく、学会の喧噪が消え去った後、あらゆる僻見や思惑がはぎとられたときに初めて見えてくるものだと書いておられます。先生らしい感性の一端を見た思いがしました。

先生は文学がご専門ですが、理系も得意とされ、コンピューターはお手の物。私たちの指南役を実にこころよく長い間、引き受けてくださいました。今のようにメディア班がなかったころ、私たちはこぞって田川詣でをして、コンピューターの教えを請うたものです。先生がいなければどうなっていたことか。今でも多くの人が「マック」を使っているのは、田川先生の大きな功績だと思っています。音楽もジャズやクラシックを大変お好きだったとか。タンノイのスピーカーで一人、いや、奥様とお二人で、音楽に耳を傾けておられる姿が目に浮かぶようです。

先生の授業は一般受けする、どの学生もこぞって参加するというようなものではなかったかもしれません。自分の興味のあることをする。それに興味のある人はついていらっしゃい、そんな調子ではなかったでしょうか。それでも本学を巣立った、数少ないアメリカ文学研究者の卵が先生のゼミから多く育っているということを考えれば、やはりわかる学生にはそのよさがわかる、すぐれた教師のお一人だったのだと思います。

先生はこれからも淡々と、お好きな本を読まれ、お好きな音楽を聴かれ、お好きなコンピューターを側に置きながら、日々を過ごされるのだと思います。そう言うとそれはまるで、浮き世離れした仙人のように聞こえるのですが、先にも述べましたように、人生の中で自分にとって大切なものはしっかりと手に入れ、しかも周りには流されず、自分らしさを貫くという実に着実で現実的な側面もお持ちです。先生のような、自分流に生きる達人になってみたい。そう願っているのは、私一人ではないのではないでしょうか。今、先生が本学を去られ、あらためてそのような想いを強くしています。